

huwari

『ふわり』

「あ、あの……すいません」

僕の前で彼女は、夕焼けを背に縮こまって、立っていた。

長い沈黙の後、ようやく発した言葉がこれだった。心なしか小さな身体が震えているような気がした。

「あのさ、僕のこと、鬼かなんかだと思ってるだろ。べつに取って食うつもりはないんだから、そんなに脅えないでくれよ」

それが冗談に聞こえるよう、できる限り優しげに話しかけたつもりだった。

だがその効果はなかったようだ。

彼女は余計に泪目になったように見えた。

考えてみればこの子と僕とは一回りも年が離れているんだ。どんなに親しげに話しかけたとしても、やはり同じ視線で接することは簡単じゃないだろう。

いや、ホントは同じ視線で接しているなんて思ってるのは教師だけの自己満足なのかもしれない。

「すいません、すいません」

ただ、今の苦境からすべてを解き放ってくれる魔法の呪文であるかのように、繰り返される“すいません”に、僕は頭をかくしかなかった。

(こういうときにどう対応すべきか、初任者研修じゃあ、教わらなかったもんなあ)

この状況から解放して欲しいのは、むしろこっちだった。

初任者研修で僕の担当だった、ちょっとハゲかけたベテラン教師の顔を思い出しては、ちょっと恨めしくなった。

だが、このままでは堂々巡りだ。先に声をかけた以上、こちらから事態を打開しなくちゃなるまい。

「なにを謝ってるのか、僕にはわからないんだがなあ。そんなに悪いことしてたのかい？」 ずっとうつむいたままだった彼女の顔が、わずかに上向き、初めて謝罪以外の言葉を発した。

「……見てたんじゃないんですか？」

その視線はあまりにまっすぐで、こちらがひるんでしまいそうだった。

世間からいわせれば三流の大学をやっとの思いで出て、僕がこの中学に新任教師として着任してから、ようやく五ヶ月が過ぎようとしていた。

huwari

いきなり担任を任されたのが、今いる教室、一年三組。

地方の中学……といえばまだ聞こえはいいがはっきり言ってしまえば、過疎も過疎のド田舎だ。とはいえ、他に教師がないわけじゃない。

それなのにこんな大学出たての若造に担任なんて任せていいのかね……なんてずっと思っていた。

おまけに教師になった理由が理由だ。

正直いえば、近頃のスレたガキどもを相手に教師をやってゆく自信なんかまったくなかったから、こんな地の果てのようなところに“逃げた”という意識が強い。

大学時代、教職を取ったのも周囲に流されて、とりあえず資格でも取っとくか。そんな感じの不純な動機だった。

普通に就職さえできれば、きっと教師なんてやることもなく、教職を持っていることなんてとうに忘れて、平凡な会社員をやっていたに違いない。

しかし世の中それほど甘くもなく、ろくに就職活動もしてこなかった人間の入り込める会社など、この御時世どこにもなかった。

教員だって、決して広い門、ではなかったのだが、なにを間違ったのか試験を通過してしまった。

そんなもろもろの不純な動機の結果が、ここにいる僕というわけだ。

目の前にいる真面目そうな彼女。

怖い顔で僕を見つめている彼女。

それが記念すべき初めての僕の教え子だった。

「見てたわけじゃないんですね？」

先ほどのような疑問形ではない。

今度は明確に問い詰める口調だった。

その打って変わって、責めるような言葉に僕は言葉に窮した。

放課後の見回りで、誰もいないはずの教室のドアを開けた瞬間、この子と目が合っただけだ。

なにをしていたのかまでは、見ちゃいないのが真相だ。

だが、なにか校則に触れるようなことをしていたとしたら問題だ。

たった五ヶ月しか経ってないのに、問題を抱え込むことになるのは願い下げだった。

「……み、見てたよ。一部始終。ただ君の口から聞きたいんだ。悪いと思うなら、自分の口で言いなさい」

姑息な策をろうする。嫌な大人の典型だ。

だがその瞬間、彼女のただでさえ小柄な身体が、一回り小さくなったように見えた。

瞬間、開け放たれた窓から吹き込んだ初秋の風が教室の中を駆けた。

huwari

それが彼女の小さな身体の後ろにあった、彼女が懸命に後ろ手に隠そうとしていた“それ”をふわりと舞わせた。

床に落ちた“それ”は、ほのかに薄紅色の小さな封筒だった。

この歳ごろ特有とっていい丸みがかった文字がちょこんとあった。

宛名らしき名前を記憶と照合する。

それが自分のクラスの男子生徒の名だとわかるのに、ちょっとばかり時間がかかった。断じて忘れていたわけじゃない……たぶん。

それでも名前は出てきても、顔がおぼろにしか思い浮かばない。

瞬間、はたと思った。

オマエは生徒ひとりひとりの顔を正面から見ていたのか？

自分は教師に向いていない。

なんとなくここにいるんだ。

そんな自分に対する言い訳で、この三ヶ月の日々、大過なく過ごすことだけを目的にしてきたんじゃないか？

今初めて僕は自分の生徒、彼女とちゃんと相対している。半年近くなって初めて、彼女がこんな子だったと気づいている。

結果、僕はすべてを理解したようにうなづいた。

「あんまり遅くまで残ってるなよ」

一歩、教室を出て行こうとして、思い直した。

「……うまくやれよ」

そうって僕は、落ちた封筒を手渡すと、予想外の言葉に戸惑う少女の肩を精一杯の笑顔でポンと叩いた。

「あ、あの……中身、いいんですか？」

「先生はさ、他人の手紙を読むような趣味はないからさ」

僕は振り返りもせず背中そう言った。

教員室へ向かう廊下で、僕は思い返していた。

そういや男女交際禁止なんて、今どき時代錯誤なことが生徒手帳に書いてあったっけ。

そんなこともすっかり忘れていた。

いや、あんなもの頭に入れてるヤツなんているのか怪しいものだ。すでに化石ものの校則だ。作った側だってきっと忘れてる。

……それにしてもラブレターなんてね。

今時、こんな古風な子がいるとは思わなかったなあ。

しんとした廊下を歩きながら、なぜだか教師としてやっていけそうな気がした。

huwari

同時にあんな少女を相手に、姑息なはったりをかました自分が、ちょっとだけ哀しく思えた。

明日はひとりひとりの顔をちゃんと見て、あいさつをしよう。

「おはよう」って。

今自分にできる精一杯の想いをこめて。

そしたら、すこしだけ教師に近づけそうな気がした。理想なんて口幅ったい。

ただ、それでようやく教師の卵としてのスタートラインにつけそうな気がした。

今の僕はまだスタートラインにすらたっていないのだ。

初秋の気まぐれな風がまたふわりと舞った。